

**“ 龍の眼 ” : 資料と通信 比較民俗研究会の記
録 (2009年 第95回 ~ 2009年 第100回)**

雑誌名	比較民俗研究 : for Asian folklore studies
号	24
ページ	252-254
発行年	2010-03-31
その他のタイトル	<The Eye of the Dragon : Resource and Memoranda>Records of The Comparative Folklore Association (2009.4-2009.12)
URL	http://hdl.handle.net/2241/106311

■ 比較民俗研究会の記録

・第95回 (2009年4月10日)

陶 立 瑠 (中央民族大学民俗学教授、
中国民俗学会副会長、国際亜細亜民俗学
会会長)
「中国民俗学の現状」

・第96回 (2009年5月25日)

何 彬 (首都大学東京・都市教養学部
社会人類学コース教授)
「沖縄と福建省の盆行事について」

・第97回 (2009年6月25日)

永野善子 (神奈川大学人間科学部教授)
「フィリピン革命の英雄ホセ・リサールの
神格化と日本の象徴天皇制の比較考察」

・第98回 (2009年7月17日)

西澤治彦 (武蔵大学人文学部教授)
「都市の再開発と回族コミュニティーの変
貌—江蘇省南京市の事例から—」

・第99回 (2009年10月27日)

娜仁格日勒 (内蒙古大学外国語学教授、
日本学術振興会外国人招待研究者、国立
民族学博物館外来研究員)
「モンゴル社会主義的近代化を解説する一
つの手がかり——冷戦期におけるモンゴ
ル軍隊生活の実態に迫る——」

■ 比較民俗研究会100回記念研究会

2009年12月6日(日曜日)午後3時から神奈川大学横浜キャンパス20号館で比較民俗研究会の100回記念研究会が開催された。比較民俗研究会は現在、神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科の教授である佐野賢治教授が1989年筑波大学に在職していた当時、日本、中国、韓国などの大学院ゼミ生が中心となって発足した研究会である。

民族と国家の関係を異なる民族の生活文化の理解から接近しようという趣旨の研究会は月1回の発表会と年1回の研究誌の発刊を続け、今年で24号を発刊することとなった。

今回の研究会は「民俗学からみた東ア

ジアの常民の生き方」というテーマで小熊誠教授(神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科)とナランビリケ(神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科博士後期課程)の司会で3人の研究者が発表した。開会の挨拶では佐野賢治教授より比較民俗研究会の沿革と趣旨説明などの紹介が行われた。

引続き発表が行われた。発表内容を以下簡単に要約する。

●発表1:蔡文高(国学院大学兼任講師)

テーマ:「中国における民俗信仰の復興—福建省長汀県の事例を中心に—」

内容:現在、中国の自発的な民俗信仰の復元は民間によるものであり、信仰

施設の修復は中国社会の変化により新たな信仰を生み出している。したがって神の神展様式と信仰形態は変化を招来することとなってきた。それを福建省長汀県の事例として調査分析した発表であり、変貌する中国社会の姿を論じた。

- 発表2:梅花（中国内蒙古大学民族学与社会学学院副教授、現在東京大学総合文化研究科派遣研究員）

テーマ:「内蒙古地区蒙古族佛教信仰現状 ―トウレートゲゲンスムの事例を中心に―」

内容:チベット仏教は16世紀末、モンゴル地方に伝播した後、清朝、中華民国、新中国などの歴史を経て、モンゴルに広がり、また中断されている。ここでは20世紀（80年代）から復元されたあり様について概観した。内蒙古東北の興安盟ウランホト市のトウレートゲゲンスムの事例を取り上げ、現時点でのチベット仏教における寺院の復元、ラマ僧の情勢、民衆と宗教活動との関連、政府と寺院の関係などを考察した。

- 発表3:古谷野洋子（神奈川大学日本常民文化研究所特別研究員）

テーマ:「島々と海をめぐるモザイク模様のネットワーク―八重山諸島波照間島のカツオ漁と黒島のザコ捕りを中心に―」

内容:沖縄最南端の八重山諸島は水のある「高い島」（西表島・石垣島・小浜島）と水のない「低い島」（竹富島・黒島・新城島・波照間島）とにわけられ、

従来は「高い島」と「低い島」のネットワークが注目されてきた。しかし稲作と漁業を関連づけ「低い島」どうしのネットワークに注目した。

以上、3名の発表後に総合討論が行われた。

「民俗学からみた東アジアの常民の生き方」というテーマで開催された100回記念研究会の趣旨は世界常民の生き方を互いに理解し、様々な衝突と葛藤を解消し、民俗学の役目を果たすということである。今後、比較民俗研究会は日本・中国・韓国、各国での研究誌の交替発刊と研究会の交替開催を目指して研究会を続けるつもりである。

（金泰順記）

写真（左上・左から佐野、蔡、左下・左から梅花、古谷野）



国際常民文化研究機構の発足

神奈川大学日本常民文化研究所は、渋澤敬三が主宰したアチックミュージアムが創設された1921年から数えて、今年でちょうど90周年を迎える。その学術的意義は、所蔵する漁業制度史と民具研究を中心とした資料の蓄積と、研究領域としては海をめぐる歴史と文化を核としながら、歴史学と民俗学を学際的に融合するという学問的特徴をもっていることにある。その有意性は、従来一定の評価を得てきた。しかし、研究所としては、史資料の所蔵だけでなく、その学問的蓄積を生かして、より現代の学術に貢献していく努力が求められる。

その一つが、日本常民文化研究所と神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科を基盤として採択された、21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」であり、2003年度から2007年度の5年間に数多くの有意義な研究成果をあげた。2008年度から、日本常民文化研究所の附置機関として非文字資料研究センターが開設され、この研究分野の世界的研究拠点形成を目指して研究活動を継続している。(詳しくは、<http://www.himoji.jp/index.html>)

さらに、2009年度から文部科学省「人文学及び社会科学における共同研究拠点の整備の推進事業」に採択され、国際常民文化研究機構(以下、機構という)が発足した。機構は、日本常民文化研究所を基盤として、その漁業制度資料25万点や渋澤フィルムの映像資料、日本民族学振興会からの引き継ぎ資料など膨大な資料の蓄積が評価され、それらの資料の公開、共有を含めた研究活動を展開して国際的・学際的な共同研究拠点を形成することがその目的とされている。

機構の研究活動は、大きく3つに分類される。第一は、所蔵資料の情報共有化で、機構の第1業務と位置づけられる。前述した日本常民文化研究所の資料をデータベース化して、公開・共有化を図る。

第二は、プロジェクト型共同研究で、機

構の第2業務と位置づけられる。このプロジェクトは、初年度に①海域・海民史の総合的研究、②民具資料の文化資源化、③非文字資料(画像・身体技法・景観)の体系化、④映像資料の文化資源化、⑤常民文化資料共有化システムの開発の5つのテーマで広く全国の研究者に対して公募した。その結果、①のテーマで「漁場利用の比較研究」「日本列島周辺海域における水産史に関する総合的研究」「環太平洋海域における伝統的造船技術の比較研究」の3プロジェクト、以下②で「民具の名称に関する基礎的研究」「東アジアの民具・物質文化からみた比較文化史」、③で「アジア祭祀芸能の比較研究」、④で「アチックフィルム・写真にみるモノ・身体・表象」、⑤で「第二次大戦中および占領期の民族学・文化人類学」の合計8つの研究プロジェクトが採択された。合計64名の共同研究者と13名の海外研究協力者などを含め、77名によるプロジェクト型共同研究を推進している。

第三は、事業運営の総合的推進の第3業務である。機構運営の最高機関である運営委員会を中心として、共同研究のための研究会や国際シンポジウムなどを開催する。2010年3月27日・28日には、共通テーマ「海民・海域史からみた人類文化」と題した第1回国際シンポジウムを開催した。日本学会会議及び関係4学会の後援のもとに、3月27日は「漂うクジラー “ヒト”・“カミ”・“自然” 共生の試金石」と題し、C. W. ニコル氏「勇魚の人々」、秋道智彌氏「鯨墓と鯨供養を再考する」の基調講演のほか、ノルウェーやチリ出身研究者など5名の発表が行われた。3月28日には「海民社会と漁業—東アジア世界から—」と題して共同研究者や国際学術協定提携機関の中国、韓国の研究者を含めて10名の報告があった。

2013年度までの5年間、機構における共同研究拠点づくりの学術活動が続けられる。

(小熊 誠)